

台風たいふうのしくみ台風たいふうのしくみ

夏から秋にかけて、日本には、たびたび台風たいふうがやってきます。台風たいふうは、どこで生まれるのでしょうか。

台風たいふうが生まれるのは、日本のはるか南の、赤道えきだうに近いあたりの海の上です。あたたかい海では、海の水がさかんに蒸発じょうはつして、たくさんすいじょうきの水蒸気すいじょうきが上へのぼっていきますす。この空気が冷やされて、大きな雲になります。こうしてできたうずまきが、どんどん発達したものが、台風たいふうです。

台風たいふうは、大きなものでは、直径が千キロメートルをこえることもあります。強い風と大雨をもたらし、大きな災害を引き起こすことがあります。

台風たいふうの中心のまわりでは、風が、時計のほりと反対の向きに、うずをまくようにふきこんでいます。けれども、中心の部分だけは、風が弱く、雲がほとんどありません。ここを、台風たいふうの目といいます。

台風たいふうが陸に上がると、海からの水蒸気すいじょうきが少なくなるので、だんだん勢いが弱まってきます。台風たいふうが近づいたら、気象情報に注意し、早めにそなえることが大切です。

1 台風たいふうが生まれるのは、どんな海の上ですか。

赤道えきだうに近い海



2 台風たいふうのまわりの風は、どの向きにふきこんでいますか。

- ア 時計のほりと同じ向き
イ 時計のほりと反対の向き
ウ まっすぐ北向き

3 台風たいふうの中心の、風が弱く雲がほとんどない部分を何といいますか。



4 台風たいふうが陸に上がると、どうなりますか。

- ア 勢いきりが強くなる。
イ だんだん勢いきりが弱まる。
ウ 向きが反対になる。